

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑯

* シチリア千一夜 逃げのびた女王たち *

絳月 まや



【パレルモ中心部。三つの赤い丸屋根はサン・カタルド教会】

MILLE e una NOTTE —— 「千一夜」という素敵な名前のワインが、イタリアにはある。フィレンツェのエノテカで出会った。宮殿の向こうに、一本のヤシの木が見える。その上方に、地上に零れ落ちてきそうなほど、大粒の星々が輝いている。ロマンティックなイラストが描かれたこの青いラベルは、『アラビアンナイト』の世界を彷彿とさせる。イスラム世界の説話集『アラビアンナイト』は、ペルシャの王に、その新妻シェヘラザードが千夜に渡って物語を口述するという形式で進められる。前妻の裏切りによって女性不信に陥っていた王は、町の娘を宮殿に招いては一夜を過ごし、翌朝になるとその首をはねるという非道を繰り返していた。これを見かねた聡明な娘シェヘラザードは

自ら志願して王に嫁ぐ。そして毎夜、王の興味を惹きつける物語を語り聞かせては、話が佳境に入ると「続きは明晩」と逃げることで、命をつないでいく。

*

旧市街の古い建物の間を縫うように、路地裏に屋台がひしめいていた。地中海で最も大きな島シチリアの州都パレルモには、アラブの商人たちが始めたという巨大な青空市場が千年の昔から続いている。その一角に、美味しそうな魚介類が積み重なっていた。エイだろうか、長いヒレを持った大きな魚をさばっていた屋台のご主人と目が合った。揚げたてのタコに、シチリア名産のレモンを絞りかけていただく。旧市街の中心部まで歩くと、赤

い丸屋根の教会が見えてきた。『アラビアンナイト』の中でも特に有名な『アラジンと魔法のランプ』に出てくる王宮の屋根みたいにまんまるで、そこから、空飛ぶ絨毯に乗って、主人公のアラジンが飛び出してきそう。平べったいサボテンの鉢植えの向こうに雑貨屋がある。中を覗いてみると、イスラム美術に特有のアラベスク模様のプレスレットが並んでいた。そんな光景のひとつひとつに、まるでアラビアに紛れ込んだような錯覚を覚える。シチリアは、ブーツの形をしたイタリア半島のつま先のすぐ先にある。紀元前、古代ローマの領土に組み入れられ、イタリア語を話すイタリア人の国としての礎を築いていくのであるが、9世紀にイスラム勢力に征服されると一転、パレルモはイスラムの中心都市として繁栄していった。



【青空市場には新鮮な魚介類が並ぶ】

「あの有名なドンナフガータが、ナポリ王妃のことだったなんて知らなかったわ」。初老のご夫婦とすれ違った。ご婦人が発したその言葉にびっくりして、思わず振り返った。リュックサックを背負った旅行客風の出で立ちだった。「ドンナフガータ」——それはイタリア全土に知れ渡る、シチリアのワイナリーである。そしてそれは、私がフィレンツェのエノテカで一目惚れした「千一夜」の生産者なのである。大手なのでシチリア各地にワイナリーを持っている。ご夫婦はそのうちのどこかを訪れてきたのかもしれない。

「ドンナフガータ」は通常、「逃げてきた女」あるいは「逃亡中の女」と訳される。この名前は、シチリアの貴族ジュゼッペ・トマージ・ディ・ランペドゥーサが著した国民的歴史小説『山猫』（1958年刊行）に登場する「ドンナフガータ村」に着想を得てつけ

られた。イタリア映画界の巨匠ルキノ・ヴィスコンティ監督が映画化しているので、日本人にはこちらの方が馴染み深いかもしれない。初老のご婦人の言葉通り、この「逃げてきた女」は、ナポリ王妃のことだ。18世紀末のフランス革命で断頭台の露と消えた悲劇の王妃マリー・アントワネットの三歳年上の姉、マリア・カロリーナのことを指す。オーストリアの名門ハプスブルク家の出身であるこの姉妹は、歴史のいたずらで対極的な運命をたどる。イスラム勢力による征服の後、シチリアでは、北欧に起源を持つノルマン人、フランス王家、スペイン王家と、目まぐるしく支配者が変わった。当時、ナポリとシチリアは、それぞれが独立した王国であった。女帝と呼ばれた母親のオーストリア大公マリア・テレジアによく似て、政治手腕に長けていた姉のマリア・カロリーナは、夫のフェルディナンド4世に代わって国を治めた、事実上のナポリとシチリアの君主であった。

最初はフランスの民衆に同情的だったというマリア・カロリーナだが、最愛の妹マリー・アントワネットが夫のルイ16世と共に処刑されると、旧体制を守ろうとする欧州各国と足並みをそろえて、一度はフランス革命軍に戦いを挑んだ。しかし、破竹の勢いでヨーロッパ各国を手中に収めていくナポレオンを前に、やがては戦線離脱を決断する。巨額の賠償金を払い、不戦の姿勢を示すことで、ナポレオンの侵攻からナポリとシチリアを守るためだ。その後十年の歳月をナポリ王妃として外交に携わった後、最終的には、フランス皇帝となったナポレオンに夫の王位を剥奪され、ナポリから逃亡せざるを得なくなる。シチリアに逃れ、パレルモの南西に位置するサンタ・マルゲリータ・ディ・ベリーチェ村の宮殿に身を隠した。『山猫』で描かれた「ドンナフガータ村」のモデルになった村である。「千一夜」の生産者である「ドンナフガータ」はこの付近を創業の地としているため、王妃マリア・カロリーナにまつわるその名をワイナリー名にしたのである。

「戦わずして勝つ」。マリア・カロリーナの人生に触れると、そんな格言が思い出される。古代中国の兵法書『孫子』に記された重要な軍事戦略である。『孫子』は兵法書でありながら、非好戦的だ。目先の戦闘に勝利することに執着せず、戦いを

避けながら、長期的な視点でより大きな利益をあげ、真の勝利を得ることを説いている。外交戦略の指南書でもあり、現代ではビジネス戦略の書にもなっている。マリア・カロリーナの天敵であった軍事の天才ナポレオンも『孫子』の兵法を読んでいたというから、不戦という戦術は洋の東西を問わず、優れた選択であると言えよう。ナポレオン軍との戦いから離脱するというマリア・カロリーナの決断は、失策として歴史的評価は高くない。だが、その結果、狙い通り、ナポレオンによる決定的なナポリ侵攻を十年間先延ばしにした。勝算のない戦いを続けているよりは、ナポリとシチリアの国力消耗、すなわち民衆の疲弊拡大を食い止めるという点においても意義があっただろう。そんな彼女は、妹マリー・アントワネットとは逆に、民衆に支持されたという。だからだろうか、シチリアへの逃亡においても、「逃げた」という言葉に非難のニュアンスを感じない。「ドンナフガータ」の「ドンナ」は「女」という意味の他には、女主人や貴婦人に対する敬称としても使われる。マリア・カロリーナは、人生における苦難の局面で柔軟に作戦を変更し、逃げる勇気を持ってしなやかに生きのびたナポリの女王であり、シチリアの女王なのである。

ただし、その二つの国の女王となることは、若き日の彼女にとっては青天の霹靂であった。そもそも、彼女に予定されていた人生は、フランス王妃だったのである。マリア・カロリーナこそが、フランス国王ルイ 16 世の妻になるはずの女性だった。ナポリ国王に嫁ぐはずだった彼女の姉が急死したため、政略結婚の玉突きでマリア・カロリーナがナポリに、マリー・アントワネットがフランスに輿入れすることになったのである。もし、政治手腕に優れたマリア・カロリーナがフランス王妃になっていたとしたら、マリー・アントワネットがそうしたように民衆の血税を湯水のごとく使い果たしてしまうこともなく、フランス革命は起こらなかったのだろうか？ マリア・カロリーナがシチリアに逃亡した半世紀後には、都市国家に分裂していたイタリアがひとつになろうとする統一運動が始まり、シチリアはイタリアという国に統合される。この統一運動は、フランス革命から生まれたナショナリズムが形になって表れたものだ。それは、旧体制と決別

し、主権を持つ民衆が自分たちの意志で国家を建設していこうとする運動である。ならば、もし、フランス革命がなかったなら、今のブーツの形をしたイタリアもなかったのだろうか？ もちろん、歴史に辻はない。ただ結末があるだけだ。マリー・アントワネットは逃げられなかった女となり、マリア・カロリーナは逃げのびた女王「ドンナフガータ」として、今もシチリアの人々に愛されている。

*

千夜の物語が終わると、王はついに非道を改め、シェヘラザードを処刑することなく、彼女を生涯の妻とした。シェヘラザードもまた、逃げのびた女王である。フィレンツェに戻ると、私は無性に「千一夜」を飲みたくなった。シチリア土着の葡萄品種ネロ・ダーヴォラが主体のワインである。南国の太陽で育った赤



ワインだけに、果実の甘みもタンニンも強く濃厚なのに、不思議なほどに澄んだ味わいがした。「千一夜」は、自分の命を賭してまで町の娘たちを救おうとしたシェヘラザードの強く、清らかな心を思わせるワインだ。民衆を思うこの心は、マリア・カロリーナもきっと同じだったのではないだろうか。「千一夜」のラベルに描かれた宮殿は、シチリアに逃避してきた彼女が身を隠したサンタ・マルゲリータ・ディ・ベリーチェの宮殿をイラストにしたものである。人生において、戦いを避けて逃げのびることは、最後に微笑むための定石なのかもしれない。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

* 予約の取れないイタリア館 *

杉 栄子

2025 年の関西の目玉イベント、大阪・関西万博に行ってきた。目当てはもちろんイタリア館である。実は万博自体にはそれほど興味は無かったのだが、カラヴァッジョの作品が来るらしいと聞いて、それならイタリア館だけでも見に行こうと思い、前売りで前期券を購入した。開幕前は万博に関してネガティブな情報の方が出回っていて、開幕後も 4 月のうちは来場者数が予想よりも下回っていることが報じられていた。それほど混まないなら快適でいいわ〜などと気楽に考えて梅雨前の 5 月の平日に行くことにした。

ところが来場者数はゴールデンウィークあたりから徐々に増え、しかもイタリア館は国宝級の美術品がいくつも鑑賞できるという情報も出回り、一気に予約困難なパビリオンになってしまった。予約なしの場合は 2 時間並ぶと聞き、慌てて行く日を決めて、7 日前抽選に申し込んだ。

パビリオンの予約システムは、非常に煩雑でわかりづらい。最初に万博 ID という個人 ID を取得して、それを入場券の ID 番号と紐付けなければならない。それでようやく、まずは万博会場への入場予約が出来るようになる。その後、来場予約をした日のパビリオンの見学予約、イベントなどの参加予約に進める。つまり希望のパビリオンの予約が取れた日に行きたいと思っても、その順番では手続きが出来ない。例えば、3 日間異なる日に散らせて予約を申し込んでみるということは不可能で、とにかく融通が利かない。しかたないので 5 月 21 日に来場予約をして、その日の異なる時間帯を 5 つ選んでイタリア館の見学予約を申し込んだ。この見学予約も、2 ヶ月前、7 日前、空き枠先着、当日登録、と 4 段階もある。2 ヶ月前はとくに過ぎていたので、7 日前抽選に申し込んだのだが、見事に全てハズレてしまった。次にチャレンジできるのは 3 日前の 0 時から受付が始まる空き枠先着予約である。しかし 10 分前に予約ペ

ージに入ろうとしたところ、「あなたの前に 45,XXX 人が待っています」との表示。えっなにこれ？と思わず声を出してしまった。万博の人気ぶり、予約の困難さは、私の想像をはるかに超えていたようだ。そのまま待つこと 50 分！ようやくサイトに繋がったものの、イタリア館はすでに満席で予約できるわけがなかった。



この頃の情報ではイタリア館の待ち時間は 3 時間に延びていた。そんなに並ぶのは嫌だと思い、来場日を 1 週間後の 28 日に変更して、再び 7 日前抽選からチャレンジすることにした。しかし挑戦空しく、またもや全てハズレ。3 日前の空き枠先着予約、今度は 1 時間前からサイトに入る準備を始めた。その甲斐あって 0 時ちょうどに入れたものの、アクセス集中のため表示エラーが繰り返し起こり、3 分後にイタリア館の予約にたどり着いた時にはすでに満席、予約は取れなかった。

イタリア館には独自のアプリが存在していて、そちらからも予約が出来るということは知ってい

た。4 月に見た時には、5 月に空き枠がたくさんあったのだが、GW 後には 8 月末まで満席になり、私が行く日を決めた頃には、アプリからの予約がそもそも出来なくなっていた。どうやら、独自アプリでは万博 ID などは必要なくメールアドレスだけで予約が出来たから、大量に予約して転売するという非常に迷惑な行為が発生していたらしい。その後、転売対策が取られ、6 月以降アプリからの予約は再開されたものの、一瞬で満席になったとのことだ。

さて 5 月 28 日も予約が取れなかった。もう一度来場日を変更して予約抽選から申し込むか、あるいはもう予約は諦めて、万博に朝イチで来場予約が取れる日を選んでイタリア館にダッシュするか。決めかねていたところ、通期パスを持っている友人の S さんから、28 日一緒に行かないかと連絡があった。彼女は私と同じくイタリアが大好きで、一緒にイタリア旅行をしたこともある仲だ。イタリア館と一緒に並んで待つよと言ってくれたので、好意に甘えることにした。

S さんは西ゲート 12 時、私は東ゲート 11 時の来場予約を持っていたので、12 時過ぎにイタリアパビリオン前で待ち合わせにした。イタリア館は東ゲートからは遠く、西ゲートにはとても近い。とはいえ、より早い来場予約を持っている私の方が先に到着する予想だった。ところが実際には、S さんは 11 時 20 分に、私は 12 時 20 分に到着した。東ゲートの長蛇の列に比べて西ゲートは空いていたということと、S さんが常に予定より早めに行動する素晴らしい人だからである。(行き当たりばったりの私とは正反対。友達でいてくれて感謝している。)

イタリア館の行列は、おそらく暑さ対策のためか、日差しを遮るものがない建物の前にはそれほど並ばせず、日陰がある建物の脇に、そして大屋根リングの下へと並ぶようになっていた。それはそれは長く延びた行列だった。5~6 時間待ちと言われたが、それは多分ちょっと長めに言っているのだろう。とにかく長時間待つことを想定して、私たちは昼食と折りたたみ椅子を持参していた。座ったり立ったり、喋ったり食べたりしているうちに行列は少しづつ進み、午後 3 時過ぎにようやくパビリオンに入ることが出来た。

最初に円形劇場のような形をした部屋があり、階段状になっている観客席に座ると、5 分ほどの映像が流れる。それが終わるとスクリーンの壁が開き、展示スペースが目の前に現れるという仕掛けだ。そちらへ移動すると、中央には今回のイタリア館を代表する作品、ファルネーゼのアトラスが堂々と鎮座している。日本初公開ということだが、紀元前 2 世紀の彫刻がこれほど美しいまま残っていて、こんなに遠くまでよく運んだなあと感心するしかなかった。実は S さんと私は通関業者と一緒に働いていた元同僚である。こんな美術品をどうやって輸送したのだろう、航空か船舶か、専用のコンテナがあるのだろうか、税番は何になるのか・・・などと、業界的昔話にも花が咲いた。

展示スペースには、アトラス以外にも、過去と現代の芸術作品と、技術・工業に関するものが展示されており、自由に鑑賞することが出来た。天井には、木製の飛行機模型が吊るされている。これは何だろうと説明書きを探したところ、イタリア語と英語で「1920 年のローマ・東京間飛行で、飛行士アルトゥーロ・フェッラーリンが使用したアンサルド SVA9 型複葉機の実物大模型」としか書いていない。右下にある QR コードを読み込むと詳しい説明が読めるようになっているが、これも英語。うーん困った。探せばイタリア語あるいは日本語の説明が見つかるのかもしれないが、小さなスマホ画面で文字を読むのは辛いお年頃になっている。ひっきりなしに見学者がやってくる中で、ずっと立ち止まっているわけにもいかないし、横では S さんも待っている。詳しいことは帰宅してからゆっくり検索して読むことにした。

ローマから東京という、当時してみれば超長距離飛行計画は、イタリアのガブリエレ・ダンヌンツィオと日本の下位春吉という 2 人の詩人の発案だったらしい。当初はダンヌンツィオ本人が飛ぶつもりだったようだが断念。それでも計画は実行され、1920 年 2 月 14 日に 11 機でローマを出発し、そのうちの 2 機が 5 月 30 日に大阪に、翌 31 日に東京に到着した。総飛行時間は 112 時間、3 ヶ月半の長旅である。その飛行機の実物大模型が天井からぶら下がっていたというわけだが、被膜や機器類は取り付けられておらず、木製の骨組みだけが展示されている。その理由について、今回

の万博とイタリア館のテーマでもある持続可能性を連想させる素材であることと、骨組みだけにすることでレオナルド・ダ・ヴィンチの素描のような雰囲気を出して、「時代」という枠組みを超越するから・・・と説明されているが、ファシズムが活発だった時代を連想させたくないという意図もあるような気がした。万博の閉幕後に、この飛行機は完成され、実際に飛行可能になるらしい。そして、今度は東京からローマへと逆方向に、かつての歴史的飛行を再現するのに使われる予定とのこと。本当かな。

私が今回一番見たかったのは、イタリアの 20 セント硬貨にも描かれている、ウンベルト・ボッチョーニの『空間における唯一の連続性の形態』である。動いている人間の動的な瞬間を、静的な彫刻で表現しようとしているのがとても面白いと思う。そのボッチョーニの向かい側には、心臓を模った白い陶器が円形にたくさん並べられていた。現代の彫刻家ヤゴによる『循環器系』という作品という説明書きしかなかった。後で調べたところによると、鼓動 1 拍分の心臓の動きを 30 分割して表現しているものらしい。全部同じに見えていたけれど、実は全部違っていたのだ。一つひとつ撮影してコマ送りにすると心臓が脈打っているように見えるらしい。

イタリア館の展示品は万事こんな感じで、説明が非常に少ない、というか無いに等しい。レオナルド・ダ・ヴィンチにミケランジェロ、カラヴァッジョといった有名どころの作品は、説明がなくてもそのネームバリューで感嘆させることが出来るのだろうが、それでももうちょっと説明をつけるか、せめて日本語で表記して欲しいところ。これから行く人は、事前にある程度調べてから行く方が楽しめると思う。あと、展示の最後にある「ITALIA DEI BREVETTI (特許のイタリア)」というコーナーも個人的には面白かった。

展示スペースの 1 階から 3 階に上がると、現代アートが設置されているイタリア式庭園とレストランがある。レストランに入るにも行列があったのでお土産でも買おうかと思ったら、ショップはまだ準備ができていなかった。レストランは定期的に内容が変わり様々な地域の料理が食べられるし、週ごとに内容が変わる展示スペースもあり、もう

一度行ってみたい気持ちはあるものの、また長時間並ぶのかと葛藤中である。ともかくイタリア館に入るのに 3 時間並んだことは、通訳ガイドをする時の格好のネタとなっている。最近では 5~6 時間並ぶという噂もあり、イタリア人から「ラッキーだったね」と慰められている。

(当館語学講師)

<セミナーのご案内>

「イタリア語翻訳者の憂鬱、

通訳者のジレンマ」

～翻訳体験ワークショップ付～

将来はイタリア語をマスターして、翻訳をしたい、通訳ガイドになりたいと考えている貴方。実は翻訳・通訳の難所は語学の壁だけではないのです。今回のセミナーでは、現在ご活躍中のお二人にお越しいただいて、イタリア語通訳、翻訳の実情やエピソードなどを存分に語っていただきます。さらにセミナー中、参加者の皆様にも簡単な翻訳体験をしていただく予定です。

・講師: 二宮 大輔(翻訳家、当館元受講生)

杉 栄子(当館語学講師)

・日程: 2025 年 7 月 19 日(土) 10:30~12:30

・場所: 日本イタリア会館 京都本校

・受講料:

京都土曜日イタリア語クラスの受講生 無料

上記以外のクラスの受講生 2,000 円

個人維持会員の方 1,000 円

一般の方 2,000 円

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>